表情し得る方法を用ひる樣いたしたいものです』

幼稚園に於ける幼兒保育の實際

某女史

是は某幼稚園に於ける最少幼兒一組を担任せる某氏が一年間の受持幼兒保育狀態を概括して記述したるものにて實際家の參考とやならんかと茲に掲載することゝせり。尙本篇完結の上は順次二の組一の組等年長者の保育狀態をも續載する豫定なり。

一 幼兒

幼兒四十名內男兒二十名女兒二十名

二 保育事項の時間配當

最初入園の日より三日間は唯子供を部屋に入れ思ふがまゝに席を與へ話をして見たり名前を聞いて見たり時には六球、積木を貸し繪を見せて遊ばしめまた、子供の知れる唱歌を唱はしめなどして兎に角幼稚園に馴れしめんことをつとめたり。またそれと共に附添を離さしむる樣仕向けたり。土產としてはつなぎ方の先に圓形の蝶をつけしもの、たゝみし帆掛船 豆細工、の魚などを與へたり。

明治四十一年四月十三日より

曜／時	九時より	九時十分より	九時廿分より十時より	十時十五分より	十一時より	零時三十分より
月	會集參觀	內遊	外遊	外遊	食事	歸り支度
火	同	同	同	談話	同	同
水	同	同	同	畫方	同	同
木	同	同	同	積木	同	同
金	同	同	同	六球	同	同
土	同	同	同	摺紙	同	歸り支度

唱歌は別に時間を定めず其時々に子供の知しるものをうたはしめたり

明治四十一年四月二十七日より

曜／時	九時より十時廿分迄	自十時廿分至十時廿五分	自十時廿五分至十一時	自十一時	自零時三十分
月	會集	內遊	外遊	食事	歸り支度

明治四十一年五月十六日より午前八時半始業午后零時半終業（但し五月十六日より）

曜／時	火	水	木	金	土
八時卅分より九時四十分迄	會集	同	同	同	同
自九時四十分至十時	外遊	內遊	外遊	內遊	外遊
自十時至十時四十分	唱歌	外遊	唱歌	外遊	唱歌
自十時四十分より十二時より	畫方	談話	積木	畫方	摺紙
	同	同	同	同	同
	同	同	同	同	歸り支度
	自同時	同	同	同	

明治四十一年七月一日より八時始業午前十一時終業となるより午前十時卅分より歸り支度をなさしむ

曜／時	月	火	水	木	金	土
自八時卅分至九時四十分	會集	同	同	同	同	同
自九時四十分至十時	內遊	唱歌	內遊	唱歌	內遊	唱歌
自十時至十時卅分	外遊	同	同	同	同	同
自十時卅分至十時半	積木	畫方	談話	積木	畫方	摺紙
自十時半	外遊	同	同	同	同	同
自零時卅分	食事	同	同	同	同	歸り支度
	歸り支度	同	同	同	同	

明治四十一年九月十一日より仝十月廿四日

自明治四十一年十月廿六日至同十二月廿四日すべて仝前にして金曜日の畫方を畫方と板排とを隔週交互になしたり

自明治四十二年一月十一日至仝三月廿日

曜／時	月
自九時至十時半	會集
	內遊
	外遊
自十時卅分至十時十五分	畫方
自十時四十五分至十一時	外遊
自十一時	食事
自一時	歸り支度

火	水	木	金	土
同	同	同	同	同
唱歌	内遊	唱歌	内遊	談話
同	同	同	同	同
板又は環	談話	畫方	積木	摺紙
同	同	同	同	同
同	同	同	同	歸り支度
同	同	同	同	

土曜日の摺紙にはつなぎ方豆細工等を混じたり又積木板排環排等には大抵貝を與へ貝排の練習をなしたり

四各課目中保育に用ゐたる事項の題目及順序

(一)遊戯

一列行進

雁　蝶

鳩ぽつぽ　蓮の花

風車　雀

結んで開いて　禮の遊び

(二)唱歌

蝶　渦卷

かり　蓮の花

君が代　鳩ぽつぽ

さよなら　雀

雲雀は歌ひ　飛車

水遊び　みがかずば

一月一日　桃太郎さん

雪やこん〳〵　お正月

渦卷　紀元せつ

椿　グウドモウニング

(三)談話

桃太郎　舌切雀

たりくすと金ちやん　雛鶏と親鶏

兎と龜　猫の話

兎の片耳　強い鶏

犬の子供を救ひし話　鶴と龜の話

蚊と獅子の相撲　獅子と鼠

以上の外に其時によりて色々のことを話したり。即ち毎日の躾け方、休暇、行啓、天長節、お正月、紀元節、米鑑隊の歡迎等の話或は四時折々の天候其植物、其

毘虫等につきての話をなしたり。また一度の話題は二度乃至四五度も繰り返さるゝものにして復習の時には成る可く子供に話さしむる樣になしぬ。

(四)六球
雀　風車

(五)積木
(はじめは箱を與へず單に積木のみを與ふ)
正方形四個にて隨意　長方形四個にて隨意
正方形二個長方形二個にて隨意
長方形正方形の各
長方形六個にて隨意
三個宛にて隨意

(六)板排
滊車　門
滊車　燈籠
腰かけ
滊車にトンネル
橋　門　軍艦
凱旋門
塔

かり　燈籠

(七)環排
提灯(○)(板をも與ふ)顏
眼鏡　貝をも與ふ
魚に水　果實

(八)摺紙
本　船
雀　(正方形)
(圓形)
(正方形)

(九)畫方
山　池
りんご
山に旗
蝶

かりに山(山は貝にて付らしむ)

山
バッタ
蝶(圓形)
肩かけ(豆細工に人を作り其れに着せしむ)
かり

山に日
かだんご
旗
舟

波に舟
梯子
水に魚　かは魚
其他隨意

五保育の方法及成績の大要

西も東も右も左もしらぬ花の如く愛らしき子供のはじめて家庭を離れて幼稚園の門をぐくりし當時彼等の感想果して如何、おそろしき所、恥かしい所、いやなところ、面白いところ等種々ありけん。斯る子供四十名をあづかりし第一學期の初め如何にせば宜しきか判らざりき。然し兎に角これ等をして幼稚園に馴れしむるは第一の急務なりとまづ其方面につくしぬ。入園當時はたゞ是とて目立ちしことは勿論なさず。たゞ成可く機嫌よく遊ばしむると共に附添を離さしむるやうに努めたり。其の席も別に定めず子供の好むところに座せしめ萬事を窮屈にせずして害なきことは極めて自由にせしめたり。其子等の家庭にある時のことを考へ合せて成可く其れに近き方法を凡てに於て取るやうつとめたり。斯くする內子供も次第に馴れて四月十一日には一人、四月十三日には一人四月十六日には一人四月廿七日には七人附添を離すに至り五月廿六日には凡ての子供全人附添を離れて樂しく遊ぶに至れり。又入園當時は常に泣きし、某々の三人も頓がて涙を收めぬ。斯くして四十名は全く幼稚園のものとなり毎日〳〵樂しく面白く共に遊ぶ樣になりぬ。斯くて夏の休暇前には折角これほどになりしものを六十日も休みては又もとの通りに後戻りしはせぬかといらぬ心配をする樣になりぬ。先づ第一學期の成績は好良なりき。九月十一日幼兒登園せしに皆大きくなりし樣覺えぬ。きた休暇前に取越してなせし心配の全く無用に歸せし樣なる有樣には全く嬉しかりき。唯某々の三人ばかり少しく泣きしが他は何れも機嫌よく第二學期の始めを迎へたり、此當時意外に感じたるは

一子供がよく幼稚園に馴れて居ること
一列を作りて歩むことの上手になりしこと
一尾田前川などが以前より能く色々のことを話すやうになりしこと
一唱歌の柏子がおそくなりしこと等なりき。

第二學期に至りては第一學期よりは少しくするらしく物事をなせり。されども子供むして無理にいやなことをなさしむるが如きことは決してなさず飽迄も子供を標準として出來得る限り自由になしたる積りなり。

第三學期に至りて次第に暖くなる頃より幼兒の元氣急に增して遊ぶことも能く遊びたれども中には隨分亂暴を極めしものもありたり。又此頃より男女別々となり男兒は其勢力を逞くし女兒をば顧みざるに至れり。外遊等にあつて自然に分るは宜しけれど其他のことにありては何事も共にせしむること必要なれば其方面に心せり。二月十五日始めて子供の席を定めたり。其時も別に拒むものとてはなかりしが其後風邪麻疹等のために缺席者多く机を一つ又は二つに纏めしため定めたる通りには實行することは能はざりき。

一年間を通じて別に之と云ふ出來事もなく樂しく暮し面白く過して保育の成績もまづ惡き方にもあるまし尙以下各項につきて少しく述べん。

一始業前

子供の來る迄に室内を清潔にして其日の保育に差支なき樣に準備す。頓がて一人二人三人四人ぽつり〳〵とあ辨當さげて部屋に入り來る。「先生オハヨーと」挨拶してはや膝に倚り掛りて遊ぶ大抵は部屋にて遊べども天氣よき時は外にても遊ぶ。故に監監者は室内と室外とに要しぬ。

二會集

チリン〳〵こゝにもかしこにもバタ〳〵と駈け來る小さき靴音賑はし鋤もしやもぢも又の時を期して收められ互に劣らじと席につく頓がて樂器に合せて會集に行く此時氣も心も新らし。頓がて一の組を始め三の組に至る迄一人の指導の下に歌ひ舞ふ紅葉の如き手を差し上げて「蝶々」餘念なきも實に愛らし。

三の組にありては入園當時二三日は此場に臨むこと能はず。唯己が部屋の中にありしが暫くして參觀に出かけぬ。いつにならはあの中に入りて共に出來るかと他の組を羨ましく思ひ居たりしもやがて小さき四十名も其中に入ることを得て嬉しかりき。會集の時には此組自身のみの内遊の時よりも

きれいになすはおもしろし。

（三）出席調べ、躾け方

會集終りて内遊することもあり、又部屋に入ることもあり、朝の出席調べの時には行儀を正しくして其名前を呼ばれしものは「ハイ」と答へしむ。大抵はよく返事すれども某々の二人は何うしても返事せず「甲さん」と呼べばニッコリと笑ひ、乙さん「と呼べば下を向くか然なくば知らぬ顔す。出席者を調ぶるに初めは出席簿の順に帖面を見て其名を呼びしが其後には出席者のみを片端より呼びて早く正しく返事せしむる樣になせり。其時には正しく足を揃へ手を膝の上に置かしむるやうになせり。出席調べのあとには大抵躾け方の話をなす。今迄に云ひ聞かせしことは

朝先生に「オハヨウ」といふこと

朝家を出づる時及訪ひしときに挨拶すること

食事の心得

杓子はかたづけること（砂遊用玩具）

少し位の事に泣かぬこと

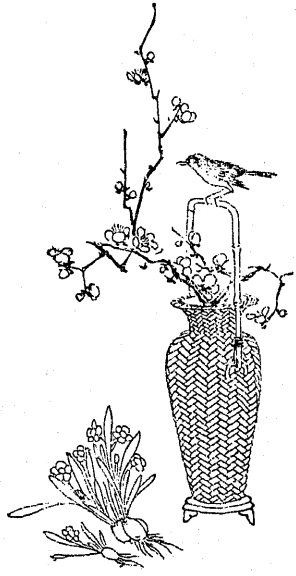
泥靴を能く拭ふこと

成る可く自身のことは自分ですること

雨の降る時は外に分ぬこと

玄關で遊ばぬこと

腰かけをおもちやにせぬこと

部屋の中や廊下等を靜かに歩むこと

等なり、大抵よく聞きしも濱野某は時々雨の中を走り廻りたり。腰掛をおもちやにせぬやうにするには一寸骨折れたり。